

ごあいさつ



公益社団法人 日本 WHO 協会
理事長 関 淳一

立冬も過ぎ今年も残り少なくなりました。改めて、刻の経つ早さを感じます。

今年の世界保健デーのテーマは、「うつ病—一緒に語ろう」(Depression —Let's Talk!) です。私共の協会では、その啓発活動の一端として、6月に大阪に於いてフォーラムを開催いたしました。フォーラムでは、東京から杉浦寛奈先生(東京大学医学系研究科)をお招きし、「世界と日本と自分のうつ病」と題したご講演をいただきました。杉浦寛奈先生はWHO ジュネーブの精神保健・物質乱用部で仕事をされたご経験をもとに、世界の精神保健、特にうつ病の現状から入られて、日本の現状、臨床医として経験されたうつ病の個々の症例などを例に、うつ病の初期症状や治療法などについて分かりやすく話されました。ご講演の後では、これまでのフォーラムでは例を見ない程の活発な質疑があり、参加者の今回のテーマに対する関心の強さが感じられました。この度「目で見るとWHO」64号を発刊するに当たり当日のご講演録に質疑の部分も合わせて掲載させていただきました。

さらに、今回は私共が知っておかねばならない国際保健関連のトピックスとして、「新型タバコにどのように対応すべきか」と題して大島明先生(大阪大学大学院医学研究科社会医学講座環境医学 招聘教員)に、また「プライマリヘルスケア—アルマアタ宣言から40周年を迎えて」と題して中村安秀先生

(甲南女子大学看護リハビリテーション学部 教授)に特別にお願いしてご寄稿頂きました。いづれも、私共が今考えなければならぬテーマについて、分かり易く解説して頂いており極めて有意義な論説で、是非ご一読頂きたいと思えます。

また、去る9月30日に当協会と日本国際保健医療学会学生部会(jaih-s)との共催企画のフォーラム「すべての人に健康を」～UHCの実現にむけて～を開催いたしました。今回、当日ご講演頂いた、渡辺学先生(株式会社PDS 役員)、本田徹先生(保健医療NGO シェア代表理事)のご講演録を中心にワークショップの概略を掲載し、報告とさせていただきます。UHCと言う国際保健医療の分野での究極の目標とも言える重要なテーマについて、御二人の講師の先生から、各々異なる目線から分かり易くお話しして頂き、ワークショップも活発に盛り上がり、極めて意義の深い一日となりました。非常に忙しい中、jaih-sの人達の強い希望にお応え頂き、一日を共にして頂きました渡辺学先生、本田徹先生に改めてこの場を借りて心からお礼申し上げます。

諸般の事情で、当64号は発行時期が少し遅くなりましたが、極めて充実した内容となりました。

ご寄稿頂いた方々をはじめ、ご協力頂いた皆様に厚くお礼申し上げます。

(平成29年11月)